



ひろしま 平和ノート

小学校
4・5・6年

～ 郷土ひろしま 被爆と復興 ～

HIROSHIMA PEACE NOTE

●もっと調べてみよう

一番電車



(撮影/川原四儀氏 提供/広島原爆被災撮影者の会)

▲原子ばくだんによって ひがいにあった電車

1945(昭和20)年8月6日、原子ばくだんによって、電車123両中108両、電柱842本中393本がひがいにあった。中には、全焼し、ばく風でだっ線した電車もあった。当日勤務していた職員は、約950名いたが、そのうち500名が亡くなったりけがをしたりしたとされている。

社内には、こんな焼け野原に電車を走らせるのは、意味のないことだという意見もあった。しかし、広島市の復興を進めるためには、まず交通の復旧を急がなければならないという信念のもとに、ひばく翌日の8月7日から準備に取りかかり、わずか3日後に、己斐から西天満町までの間で運転が再開された。

(広島電鉄株式会社「広島電鉄開業80創立50年史」より)

わしらのカーブ(樽募金)



(提供/中国新聞社)

1949(昭和24)年、広島^{の復興}が少しずつ進みながらも、市民の間には、「本当に、もとの町にもどるんだろうか。」と、不安の声が上がっていた。そんな中、たきを登る力強い鯉(カーブ)の姿に、復興への思いを込め、広島カーブは誕生した。

しかし、広島カーブはいきなり苦境に立たされる。開幕まであと3ヶ月にせまっても、選手が一人もいない。やっと集めた選手30人は、全員素人だった。それでも、選手たちは猛練習を続けた。

1950(昭和25)年、市民が待ち望んだ広島での初試合。その日は約1万人以上の市民がつめかけ、16-1で勝利した。その日、広島中がわき、勝ってふるえがとまらなくなった人もいた。

しかし資金難は続く。遠征の列車代や宿はく費はなく、バットもグローブも買えない。選手に給料もはらえない。

そんな時、「広島カーブ解散」のニュースが流れた。運営資金の400万円がはらえず、解散しなければいけないというのだ。

その発表の日、広島市民は立ち上がった。「自分たちの力で、広島にカーブを残す!!」史上最大の募金作戦が始まった。球場には酒樽^{さかだる}が置かれ、みんなが募金をした。市内各地にも募金箱が置かれた。小づかいを全部貯金する子どもや近所に募金をお願いして歩く大人。

そしてその年の暮れ、ついに400万円が集まり、カーブの存続^{ぞんぞく}が決定した。焼けあとから、「広島復興の希望」の光をともし続けたのが広島カーブだった。

★あなたにとって、「守りたい広島(もの、心など)」とは何ですか。それは、なぜですか。

.....

.....

.....

5

広島市の復興と人びとの願い